

平成27年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し（平成27年10月～12月）のポイント

常磐海域～オホーツク海におけるスルメイカの来遊量は、津軽海峡～道南太平洋海域を除き、概ね前年を下回る。海域別の予報については以下の通り。

道東太平洋海域：

来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並み。

根室海峡～オホーツク海：

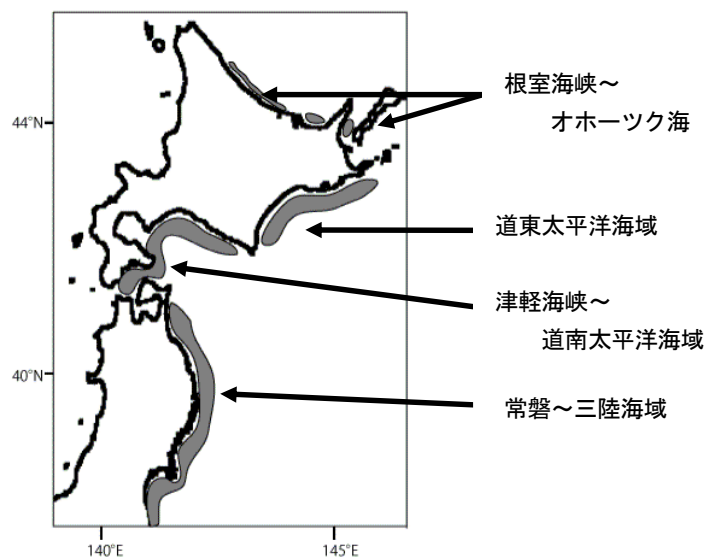
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

常磐～三陸海域：

来遊量は前年を下回る。
魚体は前半は前年より小さく、
後半は前年並み。

津軽海峡～道南太平洋海域：

来遊量は前年並み。
魚体は前年並み。



問い合わせ先

国立研究開発法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所

担当：塚本、大迫

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://www.fra.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成27年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2015年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、常磐～三陸海域、
津軽海峡～道南太平洋海域。

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網。

対象魚群：主に冬季発生系群（2015年級群）。

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：10月まで漁場形成される。
- (3) 魚体：前年並み。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：10月～11月が漁期の中心となる。
- (3) 魚体の大きさ：前年より小さい。

3. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前半は前年より小さく、後半は前年並み。

4. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並み。

I 予報の説明

2015年8月に実施した漁場一斉調査（北海道立総合研究機構函館水産試験場、青森県産業技術センター水産総合研究所、岩手県水産技術センター、宮城県水産技術総合センター）および道東太平洋スルメイカ資源調査（北海道立総合研究機構釧路水産試験場）の結果、7月～8月の漁況の経過を主要な情報として、10月～12月における来遊量を予測すると、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域、常磐～三陸海域における来遊量は前年を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域は前年並みと予測される。各海域における見通しは以下の通りである。

1. 道東太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群と考えられる。小型いか釣り船による道東主要港への7月～8月のCPUEは前年を下回り（表1）、道東太平洋スルメイカ資源調査のCPUE（いか釣り機1台1時間当り漁獲尾数）も前年を下回った。以上のことから、本予報期間における道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測される。近年、道東太平洋海域における漁獲量は11月には大きく減少することから、主漁期は10月で終了すると予測される。魚体の大きさは、道東太平洋スルメイカ資源調査結果から前年並みと考えられる。

2. 根室海峡～オホーツク海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東太平洋スルメイカ資源調査における釧路以東のCPUE、7月の国後島南東の海面水温（気象庁資料）および8月までに釧路港へ水揚げした小型いか釣り船のCPUEを用いた漁獲量予測結果から、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年を下回ると予測される（北海道立総合研究機構釧路水産試験場資料）。主漁期は平年と同じ10月～11月になると予測される。魚体の大きさは、道東太平洋スルメイカ資源調査の釧路以東の調査結果（北海道立総合研究機構釧路水産試験場資料）から前年よりも小さいと考えられる。

3. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。一斉調査の常磐～三陸海域におけるCPUEは前年を下回り、7月～8月の青森県白糠以南における小型いか釣り船のCPUEも前年並み～下回ったことから（表1）、常磐～三陸海域に分布する群は前年を下回ると考えられる。一方、道東太平洋海域の来遊量も前年を下回ると予測され（前述）、さらに、水産総合研究センターの海況予測システム（FRA-ROMS*）によると、10月中～下旬に襟裳岬の沖合に暖水域が形成されると予測されるため、道東太平洋海域からの来遊が妨げられると考えられる。以上のことから、常磐～三陸周辺海域の来遊量は前年を下回ると予測される。魚体の大きさは、調査結果から前半は前年よりも小さく、後半は概ね前年並みになると考えられる。

*国立研究開発法人水産総合研究センターにより開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム

4. 津軽海峡～道南太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、道東太平洋海域からの南下群を主体に津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群が加わると考えられる。津軽海峡周辺における一斉調査CPUEおよび、8月の函館港における小型いか釣り船の

CPUEは前年を上回った(表1)。常磐～三陸海域への来遊経路上に暖水域が形成されるため(前述)、前年よりも道東太平洋海域から来遊しやすい環境となることが予想される。このため、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されるものの(前述)、道東太平洋海域から津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並みと予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋周辺海域の来遊量は前年並みと予測される。魚体の大きさは、調査結果から前年並みと考えられる。

II 調査結果

8月に実施された第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査の結果(図1)、道東太平洋海域(42°N以北、143°E以东)の平均CPUEは4.9尾であり、前年(20.9尾)を下回った。三陸周辺海域(41°N以南、143°E以西)は0.9尾であり、前年(2.3尾)を下回った。津軽海峡～道南太平洋周辺海域(41°N以北、143°E以西)は3.2尾であり、前年(1.8尾)を上回った。調査海域全体では2.4尾で、前年(7.4尾)を下回った。

調査船調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、モードが21cmにある単峰型の組成で、前年(21cm)と同様であった。海域別に見ると、道東太平洋海域はモードが21cm(前年:21cm)、三陸海域は17cm(前年:18cm～19cm)、津軽海峡～道南太平洋周辺海域がモード21cm(前年:21cm)で、三陸海域でやや外套背長が小さいものの、概ね前年と同様であった(図2)。

III 各海域の漁況経過(7月～8月:速報値)

2010年以降の太平洋(根室海峡～オホーツク海を含む)における年間漁獲量は10万～15万トンで推移している(図3)。主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域に区分される。

各地域での漁況経過を表1に示した。2015年7月～8月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量(生鮮:速報値、一部未集計)は10.0千トンで、前年(10.9千トン)並みであった。道東太平洋海域では3.6千トンで、前年(2.4千トン)を上回った。常磐～三陸海域の水揚げ量は5.0千トンで前年(6.0千トン)を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の水揚げ量は1.4千トンで前年(2.1千トン)を下回った。根室海峡～オホーツク海およびそれ以外の海域での水揚げ量は40トンで前年(453トン)を下回った(図4)。

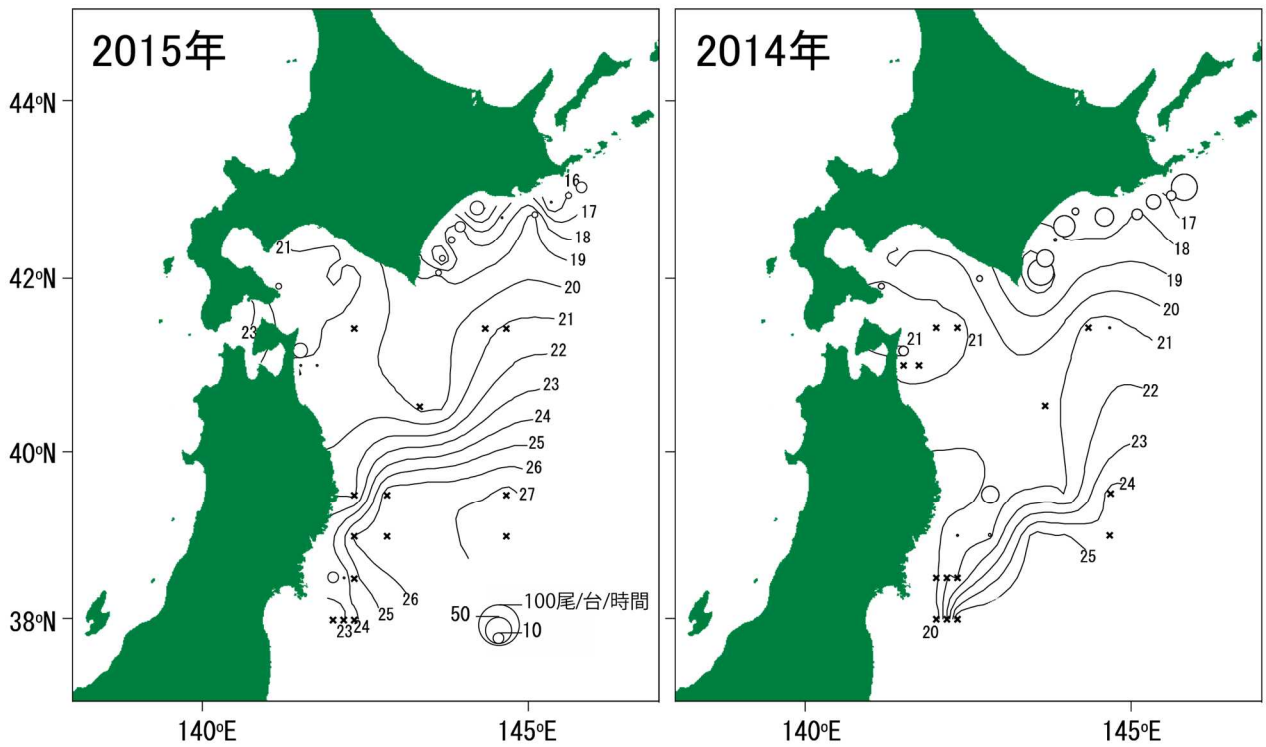


図1. 太平洋第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査の結果
2014年、2015年8月のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり
漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点。実線は等温線（海面水温）を示す。

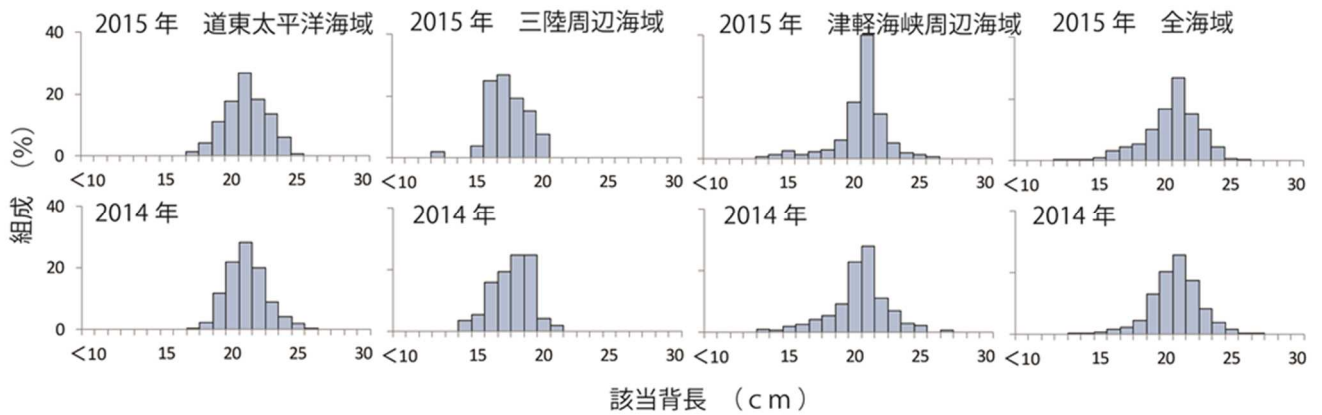


図2. 太平洋第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査による外套背長組成の結果

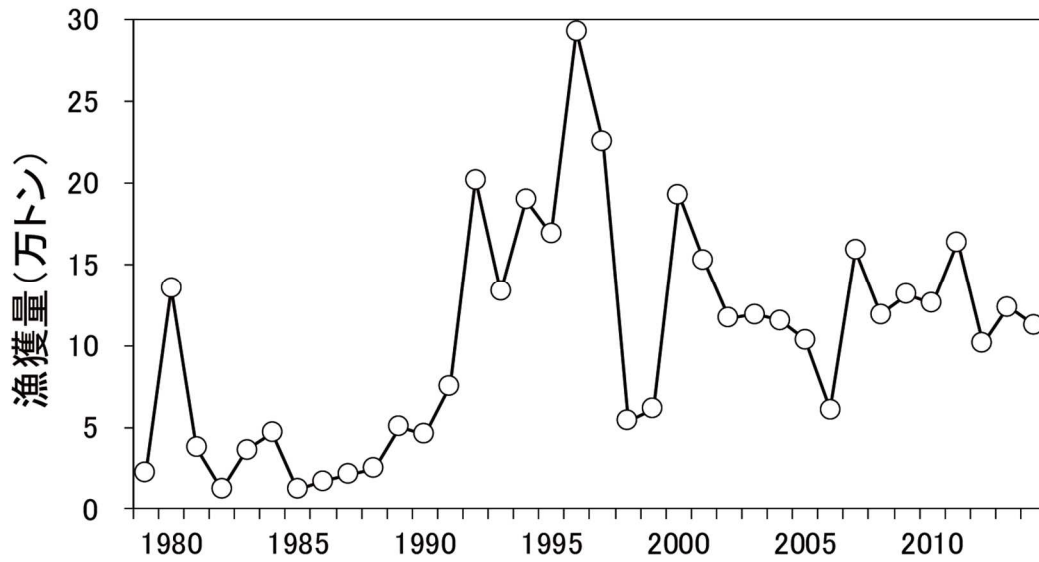


図3. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移

(集計値は暦年)

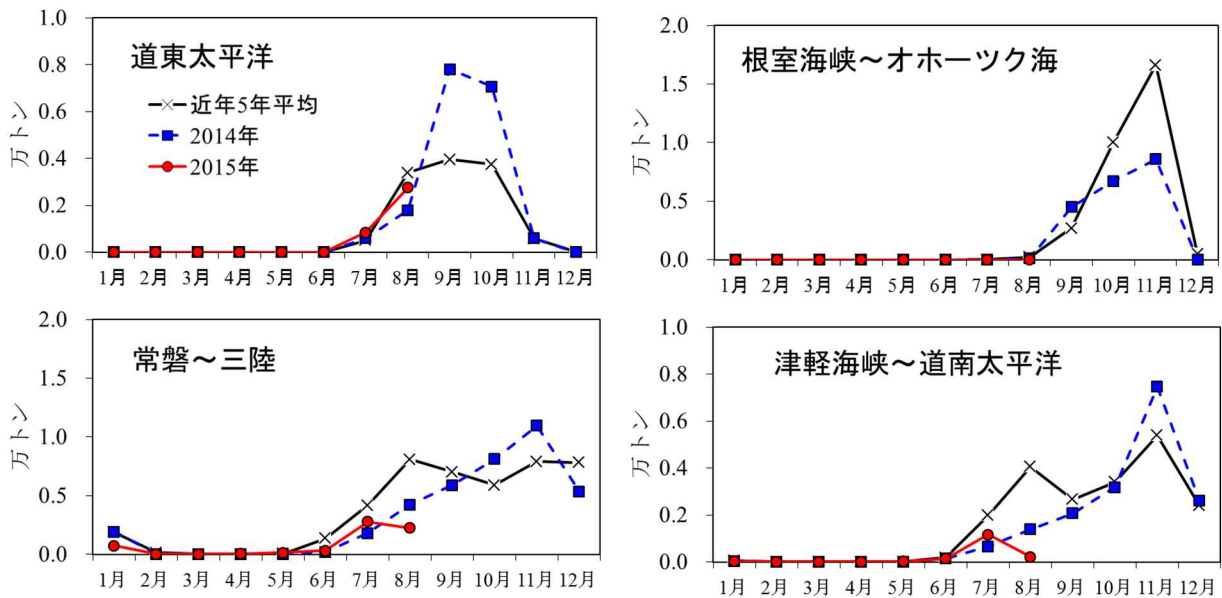


図4. スルメイカの月別海域別水揚げ量 (生鮮)

近年5年平均は2010年～2014年の平均

(釣り・定置網・底びき網・まき網)

表1. 漁況経過 (2015年7月～8月、一部未集計・暫定データ含む)

	漁況経過
北海道 道東	7月～8月の道東主要港（十勝港、釧路港、花咲港）における釣りによる水揚げ量は、3,472トン（前年比193%）であったが、CPUEは前年比87%であった。
北海道 道南	8月の函館港における釣りによる水揚げ量は81トンで前年比146%、CPUEは前年比133%であった。7月の南茅部における定置網による水揚げ量は17トン（前年比22%）であった。7月～8月の浦河港における釣りによる水揚げ量は15トン（前年比7%）であった。
青森	7月～8月の大畑港における釣りによる水揚げ量は255トンで前年比150%、CPUEは前年比116%であった。7月～8月の白糠港、八戸港における釣りによる水揚げ量は、それぞれ217トン（前年比83%）、840トン（前年比137%）であった。CPUEは白糠港では前年比100%、八戸港では84%であった。7月～8月の八戸港へのまき網による水揚げ量（3,527トン）は、前年（3,459トン）並みであった。
岩手	7月～8月の主要港における釣りによる水揚げ量は216トン（前年比17%）でCPUEは前年比92%であった。定置網による水揚げ量は170トンで前年比54%であった。
宮城	7月～8月の主要港における釣りによる水揚げ量は1トン（前年比4%）で、CPUEは前年比43%であった。定置網による水揚げ量は29トンで前年比57%であった。
福島	この期間の水揚げはなかった。
茨城	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	7月～8月の主要港における釣りによる水揚げ量（0.2トン）は、前年（40.5トン）を下回った。定置網による水揚げ量（1.8トン）も、前年（4.1トン）を下回った。
神奈川	7月～8月の三崎港と長井港における釣りによる水揚げ量（0.5トン）は、前年（1.0トン）を下回った。
静岡	7月～8月の主要港における釣りによる水揚げ量は6トンで（前年比152%）、CPUEは前年比555%であった。
三重	7月～8月の主要港におけるまき網による水揚げ量は6トン（前年比1%）で、7月の定置網による水揚げ量は0.04トン（前年比1%）であった。
和歌山	7月～8月の主要港における釣りによる水揚げ量は0.3トンで前年（14.7トン）を下回った。
高知	7月～8月の主要3港における釣りによる水揚げ量（21トン）は前年（2トン）を上回った。

注：CPUEは1日1隻当たり水揚げ量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	国立研究開発法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	